

『チンギス紀』

経団連カナダ委員長

日本ベトナム経済委員長

中南米地域委員長

双日会長

ふじもと まさよし

藤本昌義



今、北方謙三氏の『チンギス紀』を読んでいる。

これは、私の息抜きというか、暇な時間があると、例えば海外出張の飛行機の中など、しっかりと時間が取れる時にまとめて読んでいます。現在は文庫本で13巻まで出ているが、ようやく11巻までたどりついた。

チンギス・ハンに興味を持ったのは、私が福岡で育ったためでもある。鎌倉時代に起こった元寇という事件、私の通った高校は、まさに元寇の戦場となった百道の浜に近い西新にあり、一つ先の停留所は「防塁前」、元寇で築かれた石積の防壁が残された土地でもあることに起因する。中国で突如現れた元、モンゴルにいたチンギス・ハンという人物が創った国。その国がなぜ日本まで侵略しようと考えたか、そのあたりに興味を湧いたのである。

モンゴルの草原の一部族であったキヤト族の族長テムジン（後のチンギス・ハン）がモンゴルを統一し、その後、ナイマン王国、西遼、西夏と統一していく話である（今後元寇まで話が続くのかは、まだ私にはわからないが）。

北方氏の中国歴史ものはこれだけではなく、『水滸伝』『楊令伝』『岳飛伝』と、梁山泊とその意志を継ぐ楊令、岳飛の伝記をこれまで読んできた。『チンギス紀』でも、その楊令が持っていた吹毛剣が、わたりにわたって楊令の血を引くチンギス・ハンに伝えられるという話が出てくる。これは史実ではないかもしれない

いが、中国の壮大な歴史に流れる北方氏の思いを感じることができる。『チンギス紀』の中で一つの発見は、漢族だけではなく、いろいろな人種が入り混じった戦いが繰り広げられてきたのが中国の歴史である、という事実だ。これまでどうしても中国の歴史というと漢族の歴史と捉えがちだったが、秦の始皇帝の中華統一を描いたマンガ『キングダム』の中でも、シルクロードを渡ってきたキルギス族やウズベク族が未知の山の民として描かれている背景も理解できた。また南宋の時代から中国人がベトナムあたりまで遠征していたという史実も。

中国の歴史は、いろいろな部族からの侵略の歴史であり、また侵略をしてきた歴史であることがわかる。草原で繰り広げられた大きな夢を持ったチンギス・ハンがこれからのように元国を作っていくのか楽しみである。やがてシルクロードを通じて欧州まで侵略していくことになる元、また日本にも侵略してくる蒙古人。そこには果てしない野望があるのだろう。



『チンギス紀』
著者：北方謙三
集英社文庫